

## 日高山脈「幌尻岳」のトイレ問題について

平取町山岳会 会長 石森 充

日高山脈最高峰の幌尻岳（2,052m）は、日高山脈において唯一、深田久弥の日本百名山として、近年の「百名山ブーム」により登山者が急増している。

幌尻岳に登るルートは3つあり、新冠町から登るルート、日高町から北トツタベツ岳を経て登るルート、そしてもっとも一般的であり登山者の大半が利用しているルートが平取町振内から幌尻山荘を経由して登るルート（額平ルート）である。幌尻山荘は額平ルートの額平川渡渉最終地点にあり、ルート上唯一の小屋として多くの登山者に利用されている。

当山岳会は、営林署職員により組織された振内山岳会を母体としてつくられ、振内営林署（当時）により建設された幌尻山荘（現在の所有者は平取町）の管理、登山道の整備を担ってきた。

よってここでは、幌尻山荘のトイレや周辺、登山道の状況を元にして問題提起したいと思う。

額平ルートの登山口にあたる林道の北電ゲートや林道終点にあたる北電取水ダム付近にはトイレが設置されておらず、シーズン中は常に糞尿やティッシュが散乱し異臭を放っている。さらに山荘以外に山中にはトイレがなく額平川沿いの登山道や山荘上部の登山道、山頂付近にも時々、糞尿やティッシュが点在していることがある。

幌尻山荘には山荘内部に水分地下浸透汲取式のトイレが1つあり、屋外に移動式のトイレを2基設置している。3年間で1回汲み取りをし、山荘周辺にて埋立て処理してきた。しかし登山者の急増によるトイレ利用の増加や水分の地下浸透の妨げになるティッシュペーパーやビニール袋、生理用品などのトイレへの投棄量の増加により毎年、汲み取りをしなければならずその処理に苦慮している。また山荘周辺の平坦地に用を足した跡が見られるようになってきた。

山荘は通常、無人ではあるが、6月の小屋開き、薪づくり、トイレ設置、水道敷設、清掃、山荘修理そして10月の小屋閉めまで山岳会員が担ってきている。山荘利用者から利用料として1人1泊1,000円を徴収している。しかし利用料金の回収率はたったの40%である。さらに山荘は事前連絡が原則となっているが連絡をしなかったり、山荘のストーブ用に置いている薪を使って山荘の外で焚き火をしたり、山荘内の毛布を持ち出してテントの中で使ったり、山荘に土足で上がりこんだりと登山者のマナーが低下してきていると感じている。

また日高山脈ではキャンプ指定地の指定をしているところはないが、便宜上キャンプ地とされているところがある。幌尻山荘周辺もその1つである。山荘周辺のテント利用者は山荘のトイレや水道を使うにもかかわらず、山荘利用料を払う者はほとんどいません。さらに登山靴やテントによって西洋タンポポやオオバコが運ばれてきて、山荘周辺にはその小群落ができています。北カールや七つ沼カールなどでのキャンプが増えると、高山植物への影響も懸念される。

今後の対策として、登山口や山荘へのバイオトイレの設置を望みますが、設置や管理費用などを考慮すると一つの山岳会や町で設置することは不可能だと考えています。山荘までは川の渡渉を十数回繰り返す登山ルートしかない。たとえばヘリで機材を運ぶとすれば1回数百万かかってしまう。

またトイレ管理費の一部を利用者に負担してもらおうとしても、山荘利用料の回収率を考えると、トイレの有料化は現実的ではない。

携帯トイレの利便性も理解できるが、ゴミ投棄の現状を考えると、ゴミ同様に携帯トイレが投棄される可能性が大きい。ゴミの処理で苦慮しているのに、携帯トイレの始末までは到底考えられない。

国は自然公園法を制定し、幌尻岳周辺も1981年、「日高山脈襟裳国定公園」に指定された。しかし国は国定公園の利用と自然保護の推進について「掛け声」だけで、なにもしてくれなかった。

すべてをボランティアでやるには限度がある。

国がすべてをボランティアにまかせて自然保護をするというならば、「誰も山に入れない」しかないでしょう。